The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小松原さんによる質問者への応答
Author(s)	小松原, 織香
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 57-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90072
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　第７回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」

小松原さんによる質問者への応答

【鈴木さんへの応答】

小松原：鈴木さんの研究に対する葛藤を共有できるのかどうか。いま、それを私は悩んでいるところです。というのも、私自身は、論文を書く前段階の研究というのは、かなり柔軟なやり方をしています。いわゆる科学的な「仮説を立てて実証する」というプロセスを直線的に進むわけではないのです。たとえば、水俣での調査でも、とにかく現地に行って「こういうトピックについて調べています」とお伝えして、資料を見せていただいたくんですが、後ろで誰かが喋っているのが聞こえてきて、それが研究のヒントになったり……。インタビューすることもあまり得意ではありません。私は質問を自分から聞くのが苦手なので、相手がいろいろ喋っていることを聞いて、それで終わりにすることが多いです。なので、正直なところ、「生々しさ」と距離を取ろうと思ったことはほとんどなく、鈴木さんのような葛藤は抱いていません。なので、どう答えればいいのか……

一つ、解決策を考えると、「いっぱい書けばいいんじゃないか」と私は思っています。一本の論文で、なにかの全体を明らかにすることは、たぶん無理なんです。だから、私の場合はいろんな話を聞いた後、アカデミックな査読論文だけではなく、エッセイや商業原稿など、別の形でも書いてみています。ときには、フィクションの形に変えて小説を書いたり……そんなふうに、いろんな表現媒体を持って、形を変えながら、何度も言葉にしてみようと試みるのが、「他者の声」を表現するための一つの方法かなあ、と思っています。特に今は、英語で論文を書くことが増えて、文化的・歴史的背景を共有する紙幅が足りないことがよくあります。査読コメントで「伝わってないな」と思うこともしょっちゅうです。そういう時は、「この部分は書きたいけど、そのまま残しても誤解を招くだけだな」と考えて削除して、別の媒体にとっておこうと思ったりしています。書く方法や場所がたくさんあるほうが、私は楽ですね。

鈴木：質問の形を変えてもうひとつおうかがいしたいのですが、ご著書のなかで当事者の言葉と研究者の言葉というふたつの言葉が出てきたと思うんですけれど、小松原さん自身が当事者の言葉を研究者の言葉にする過程で何かズレのようなものを感じたりとか、研究者の言葉にすることで当事者の言葉がそぎ落とされてしまうというように感じたりした経験はありましたか。

小松原：たぶん、私はすごく書くことが好きなんですよ。だから、当事者の言葉と研究者の

言葉が違ったら、「わっ、２種類も原稿が書けてよかった」と思うんです。「どっちもいいじゃん、ただ違うんだよね」というのが私の実感です。むしろ、書き言葉より、話し言葉のほうが私はズレを感じます。たとえば、「今は研究者として話してるな」とか、「今は当事者として話してるな」とか、そんなふうに思います。話し言葉は編集ができないですし、アイデンティティをスイッチして、語りをコントロールすることが難しいですね。ただ、私の場合は、アウトプットするときは書くことがメインなので、今のところは研究者と当事者の二種類に分けて書こうと思っています。

【吉田さんへの応答】

小松原：研究者がカムアウトすることの是非については、本人がどう納得するのかだと思います。私自身、博士論文を書いた時点でもまだカムアウトしていませんでした。研究生活を十年続けて、やっと初めて公にしました。でも、一生、カムアウトしなくても研究は続けられただろうし、別にしなくてもよかったんです。だから、研究者はカムアウトなんて全然やらなくていい、と私は思っています。もちろん、私もクローゼットのときには、相手に苦しい経験を語らせて、自分はそれを隠して楽しているという気分はありました。でも、私がクローゼットから出たからといって、カムアウトしているほかの人の苦しみが減るわけでもないので、そのへんは「しょうがないかな」と思っています。

最近、倫理学者の川本隆史さんが哲学者のロールズについての論考を送ってくださいました。（川本隆史「ロールズ・ヒロシマ・キルケゴール 偏愛的一読者の覚え書き」『思想』第一一七五号、2022 年 3 月、2-5 頁）ロールズはリベラリストの王様のような人で、『正義論』という分厚い本を書きました。彼はある論考で「広島への原爆攻撃は重大な不正行為にほかならない」と断言しています。実は、彼は戦中に米兵として日本に駐留し、1945 年には原爆投下後の広島も訪れていました。しかしながら、その経験を公の場では語りませんでした。カムアウトすることを提案した編集者もいましたが、それは言う必要がないと断っています。彼は、原爆使用についての道徳的判断は、個人的で特殊・偶然的な経験ではなく、より一般・不偏的な根拠に基づかなければならないと考えたからです。つまり、ロールズは当事者であろうとなかろうと、道徳的に原爆使用は不正であるという判断に辿り着くのだからカムアウトは必要ないというのです。私なんかは、「当事者としてよく見知っているから、自分の言うことの正当性を認めて欲しい」と思うこともあるんだけど、ロールズは逆で「自分と違う立場の人にも、必ずこの話は普遍性があるから通じるんだ」と思うわけです。これはこれで、リベラリストの矜持というか、格好いいエピソードで面白かったです。

社会制度との接続についても、私は意図してやったわけではないので、モチベーションがないのに義務感でやらなくてもいいだろうと思います。もし、自分の考えていることの延長線上に社会制度の問題があれば繋がるだろうし、なければ哲学的に探究するだけで十分だと思います。そもそも、「当事者」という概念自体が、時代とともに流行ったり廃ったりし

ています。私は2000年代に大学に入学していますから、社会問題を研究する教員や学生が猫も杓子も当事者の話をしている状況で、学問をスタートしました。その背景には、当事者が研究者に対して「話をちゃんと聞け」「勝手な解釈をするな」と異議申し立てをしたことがあります。同時に、研究者や学生の側も、当事者に向き合って声を聞きたいという切迫した想いがありました。その熱いやりとりに私も巻き込まれていたから、ものすごく「当事者」という言葉に思い入れがあって、今でも「当事者、当事者」と言っています。でも、改めてその言葉が必要かと聞かれると、別の言葉でもいいんですよね。英語に訳すと、当事者にあたる言葉ってなかなかないですし。私は自分の本のタイトル『当事者は嘘をつく』は *Survivors Tell a Lie* と訳しています。そのほうがわかりやすいですしね。「当事者」という言葉の流行も二十年前の話ですから、今の世代の人が違和感を持つなら、当事者という言葉も変えていくのがいいんじゃないかな、と思います。

吉田：あまり自分のなかでまだ吸収しきっていない部分があるんですけれど、すごく深刻に悩んでいたことが少し軽くなってありがたかったです。詳しくおうかがいしたいなと思ったのが、3点目の当事者という言葉の扱いづらさについてです。当事者という言葉を使いたいと思ったときに、他の人を当事者というふうに呼ぶときに、もしかしたらその人は当事者と言われたくないんじゃないかということが気になっていて、どう当事者という言葉を使ったらいいか迷うところがあるので、その点をおうかがいできたらと思いました。

小松原：たぶん、それは吉田さんがお話を聞いている方が、とても難しい立場にあるからでしょうね。その人自身が、「自分には障害がある」「疾患がある」と考えているけれど、それは外部からの客観的判断によるものではない。その狭間に置かれた人の「揺れ」のようなものを捉えようとするときに、当事者という言葉が使いづらいという話ですよね。それはそうだと思うんです。「誰が当事者だと決めるのか」という問題が出てきてしまいますから。ただ、私の場合は主な研究対象が当事者の自認のある人なので、そこの揺れというものはあまり触れたことがありません。

あえていうならば、水俣病の「患者さん」という言葉の扱いの困難と似ているかもしれません。実は、水俣病の認定制度は非常に問題があるため、公式に「水俣病患者」と認められた人はごく一部です。なので、もし私が「水俣病患者」という言葉を使ってしまうと、水俣病の自覚症状があって認定の申請を出したのに、却下された人たちは排除することになります。そこで私は「水俣病被害者」という言葉を使うようになりました。ただ、自分を「被害者」というカテゴリーに入れられたくない人もいます。そこのところは、私が「被害–加害関係」という枠組みの中で研究をしているので、便宜的に被害者と呼ばせてもらう、という形をとっています。つまり、私の側が名づけてしまっているんですよね。

もっと相互に慎重に呼び方を考えるならば、インタビュー調査の際に、ご本人に聞くのが一番いいですね。「研究の中ではあなたのことを当事者と呼びたいのですが、それは大丈夫

でしょうか。もし、抵抗があれば、なにか他の呼び方を考えますけれども」という感じで、一緒に考えるのは一つの方法です。大変な経験をされている方は、「私はいったい何なのだろうか」と深く考えておられることも多いです。自分自身をどんなふうに捉えていらっしゃるのかをお聞きするのも、すごく良い時間だと私は思っています。もし、その方が「私はこう呼ばれたいです」という言葉があればそれを採用して、脚注で説明するのが良いでしょう。慎重な姿勢を取るならば、ご本人のニーズを満たすのが一番いいと思います。

【二宮さんへの応答】

小松原：若い世代は、頑張って研究するしかないですね。一生懸命やっても失敗する。そのときは、当事者と向き合うしかない。頑張るしかないですねえ。当事者であり、研究者である人にしか成し得ないことは、あるかもしれないし、ないかもしれない。私は「ある」気がするけど……でも、別になくてもいいんですよ。二重アイデンティティがいい影響があるかどうかに、こだわっているわけではないので。ただ、そういう立ち位置で見えてくる風景は、面白いんじゃないかな、という予感はあります。でも、わかりませんね。

調査の中で、当事者の声を遮ってしまったり、言葉を捻じ曲げて受け取ってしまったりする危険をどう防止するのか。それはもう、勉強することだと思います。今は研究倫理の本がたくさん出ていますから、ちゃんと調査前に勉強する。倫理審査も受ける。指導教員や先輩とも話し合って、自分だけで問題を解決しようとせず、アドバイスを受ける。そういう一つ一つの実務的な鍛錬を積み重ねていくのが一番大事じゃないでしょうか。大学院に進学している人に対してはそう思います。

二宮：僕が二つ目の質問をした背景についてお伝えします。自分ががっつり当事者を意識して研究しているというには、自分としては、まだ自分の立場とか距離感とか考えているところがあるんですけれど、たとえば、何かマイノリティ属性が自分にあって、そのなかでいろんな当事者の声を読んでいくなかで、A さんの話にはめっちゃ共感できるけど、B さんの話は違うなとか、C さんはまあまあかなとか考えることが出てくると思います。たとえば、このフォーラムのなかにも、学部の後輩が数人受講していると思うんですけれど、そのような学びたて・勉強したてっていうタイミングの人が、様々な当事者の声に対して、十分な距離感をおし量っていくことは、結構難しいというか、しんどいことなんじゃないかなっていうのが頭のなかにあります。当事者っていうものを扱うフィールドで、歪な表現にならないように、ねじ曲げたり恣意的になったりしないようにするにはどうしたらいいかなっていうのが、ひとつ質問の核にあったことです。周りと関わりながらやっていくっていうのは、本当におっしゃるとおりだなと思って、教員ももちろんそうですけれど、僕らも院生なのでできれば研究室として仲のいい関係、コミュニケーションとかできるような関係とか作っていけたらいいなと思いました。

小松原：調査の中のあれこれは、たぶん、研究を継続していくうちにわかってくるように思います。相手に対して共感したり、しなかったりということは、私は今もよくあります。でも、やればやるほど、そういう感覚はどうでもよくなっていきました。まずは、目の前の人が何を言おうとしているのか、を知ることが大事で、それに対して自分が思うことは二の次、三の次です。やっぱり調査は量がものをいうところがあります。ちょっと聞いて「こうだ！」と思うのはあんまりよくなくて……いろんな方と出会って、お話を聞く量が膨大になっていくうちに、邪念が落ちていって、まっすぐに研究にはいっていけるんじゃないかな。私自身は経験的にそう思います。

【六郷さん】

小松原：「支援者」のカテゴリーについては、「かれらは立ち位置が違うから難しい」としか言いようがないですね。私がなぜ、そこまで支援者に反発するのか、連帯を呼び掛けないのかというと、そこにはやっぱり深い恨みがあるからですね。その恨みは全く乗り越えてないので……

本にも出てきましたが、私はかつて精神科医から二次加害にあたることを受けています。もしかすると、性暴力よりは二次加害の方がマシだと思う人もいるかもしれない。でも、私にとっては性暴力と同じくらい、下手すると、今は二次加害者の方が深い傷かもしいれない、というショックな出来事でした。支援者に対する不審や「この人は裏で何をやっているかわからない」という猜疑心は、全然癒えてないですね。

そして、残念なことに、傷を上書きするような出来事がいまもいっぱい起きています。たとえば、いま、Twitter なんかの SNS で、支援者の立場の人が性暴力について発言しています。最近、ある支援者が、性暴力では挿入の有無で被害の軽重が変わるというようなことを、ものすごくたくさんの人の目に触れる形で発信しました。その人は、自分は支援者だから知ってるんだ、というようなことを言っていて……私はそのとき、身体が熱くなって、本当に耐え難いというか、頭が爆発するような想いでした。なぜかというと、私は自助グループで、具体的に「何が起きたか」以前に、性暴力そのものがこんなにも人を苦しめるんだということを、受け止めてきた経験があります。他方、支援者が「性暴力被害者の現状を知ってる」と言いながら、痛みに優劣をつけるようなことを、ネットでペラペラと喋って拡散しているところを見ると、本当に失望してしまうんですよ。それを見た人が、支援者の言うことを信じて、被害者に対して「あなたは挿入がなかったから被害が軽かった」みたいなことを言ったら……と思うと、いてもたってもいられなくなるのです。

こういう怒りとか恨みみたいなものは、簡単には消えないです。もちろん、支援者と繋がってやっていける人は、そうして欲しいんです。でも、私は無理で……そこは重い枷ですね。私は自分の限界を認めることが大切だと思っているので、それが正しくても、必要であって

も、「支援者とも連帯します」とは言えないですね。

ただ、支援者というカテゴリーを相手に与えて、個別性を見ていないというのは、私の本については誤解ではないかと思います。水俣について書いているところでは、吉永利夫さんや遠藤邦夫さんという支援者が登場します。その人たちは私の文章でも生き生きとしているし、魅力的だと思うのです。逆に個別の支援者との豊かな繋がりというのはあります。でも、カテゴリーとしての支援者に対する深い深い恨みというものは消えない。やっぱり傷が癒えないんですよね。

六郷：誠実に答えていただいてありがとうございました。さっきの小松原さんの応答というのは、ズシンときたというか、自分の限界を認めるというところに重みを感じたんですけれど、その回答を受け止めたうえで、さらにひとつおうかがいしたいことがあります。支援者に対して恨みがあるっていう表現があったと思うのですけれど、恨みという感情というか概念というか姿勢というか、それを研究というものに持ち込むことについて、小松原さんはどう考えられるかっていうのをお聞きしたいです。自分個人の意見としては、経験というものを研究に落とし込む限り、自分の経験を相手と共有しようとするというか、開いていく行為が必要だと思っていて、自分の研究の読み手を選り好みするというのを自分としてはしたくないっていう思いがあるんです。仮に恨みに苛まれて自分の経験を語れないのだとしたら、自分自身で考えたら、自分だったら研究という形にはしないと思います。研究というものは恨みを棚上げするということを含んでいるんだと思っているんですけれど、小松原さん自身はどうやって恨みという感情とどうつき合いながら研究されているのかということをお聞きしたいです。

小松原：正直に言えば、恨みながら研究していました。だから、博士論文を書くのは地獄のような苦しみでした。もちろん、研究では、客観的・中立的にフェアに支援者について書かなくてはなりません。どんなに私が個人的に恨んでいる支援者・支援団体でも、素晴らしい功績があれば、それを書くべきだと私は思いました。なので、そう書きました。けれど、地獄の苦しみだったので、もう二度とやりたくないと思いました。同時に、それでも、その作業をやってよかったとも思っています。やってみたからわかるというか……研究の中でどんなに客観的・中立的に支援者を扱おうとも、恨みは消えないということがわかりました。人間の心というのは面白いと思いましたよ。博論を書いているときは、どんなに辛くてもやりましたが、今もそういうことをやりたいかというと、勘弁して欲しい。もしかすると、ここが当事者として研究することの一番しんどい部分かもしれません。当事者として良いと思っていないことについて、その自分を切り捨てて、適切に評価すること。ほんとしんどかったんですよねえ。でも、やってよかったと思います。アンビバレントなんで、うまく言葉にならない答えになりますけれども。